９　おわりに

９．おわりに

１．来年度以降の展開

以上、多岐にわたって本プログラムの成果について報告してきた。多くの成果をあげてきたが、成果を踏まえた課題もいくつか残されている。次に、主なものを列挙する。

（１）分析結果を踏まえた育成システムの強化

本プログラムを含めて過去３回の経験から得られたデータを分析した結果、課題解決、チームワーク、コーチング・ファシリテーションを３本柱にした本学の育成システムの有効性が実証された。そこで、本プログラムが単位認定科目として正規化される平成 21 年度は、今回の分析結果を踏まえて、育成システムを強化する。

すなわち、分析の結果、シンキング、アクション、チームワークの三つの力はパラレルに成長するのではないことが明らかになった。15 週間の授業によって、シンキングとアクションとは大きく成長するのに比べて、チームワークの伸びはそれ程でもない。アクションの力が十分に発揮できるまでに成長していなければ、チームワークが作用しないのではないかと推察される。

ところで、本学の育成システムは１～３年次生までのコースになっており、ステップを踏んだ一貫制の育成システムをとっている。上記の仮説を受け入れるとすれば、ステップを踏む本学の育成・評価システムは合理的であると思われる。

そこで、平成 21 年度は次のような工夫をして、育成システムの強化を図る。すなわち、１年次生のクラスでは、シンキングとアクション、特にアクションを十分に成長させるために、自己開示を促進させることを意図したクラス運営を心がける。そして、翌年度には、シンキングとアクションとが十分に成長した学生が、２・３年次生のクラスでチームワークの訓練をすることになる。

本学は、すでに述べたように、過去３回の実績を持っている。しかし、すべて、１回きりの単発のプログラムである。平成 21 年度には、平成 20 年度の受講生が引き続き受講するので、成長のプロセスを追跡することが可能になり、平成 21 年度にかける期待は大きい。

（２）評価システムのＩＴ化を含めた合理化

厳密な他者評価は今回が初めての経験であったこともあり、評価システムには経済産業省のもの（『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』）をそのまま使用した。具体的な行動事例もあがっており、使いやすくなっている。一番のメリットは、学生の自己評価は本人の具体的な行動目標になり、好循環的に社会人基礎力を向上させる要因になることである。しかし、利用してみて、いくつかのデメリットにも気がついた。一つは、他者評価の難しさである。外から観察すると、12 の要素が重なり合って判定に苦しむことがしばしばあった。社会人基礎力の普及を考えれば、他者評価については、何らかの簡素化の必要性を感じた。また、自己評価、他者（教員）評価、他者（企業担当者）評価と三つの評価があり、どれが本物で、客観的なのか、それが分らない。検査のような客観的な評価の必

要性を感じる。最後に、評価作業が思いのほか面倒で煩雑である。そこで、学生の人間疎外に配慮しながらの、評価システムのＩＴ化も視野に入れておく必要がある。

（３）社会人基礎力育成のためのメソッドの改善・充実

本報告に、今までに培ってきた社会人基礎力育成のためのメソッドを掲載した。しかし、まだ、完成されたものではなく、暫定版である。さらなる経験を踏まえて、充実したものに仕上げたい。

（４）社会人基礎力の学内での広がり

本プログラムにあっては、社会人基礎力の学内での広がりは、主に、教職員の手で進められてきた。しかし、学生の手でそれを広げることも必要なのではないだろうか。それが、学生の社会人基礎力を高め、社会人基礎力と専門知識とを結び付けることにつながるのではないか。

以上、今後の課題を列挙したが、何れも、平成 21 年度「体系的な社会人基礎力育成・評価システム開発・実証事業」の提案書に盛られている。